王粛の災異思想

南澤　良彦

序

西漢の董仲舒以来、災異説は儒教の重要な一分野として、両漢を通じて広く社会に浸透した。災異を帝王の失政に対する天の譴告とみなすことから出発した災異説は、しだいに将来の異変への予言の説に転化し、それによってむしろ、為政者の強い関心を呼び、儒者の発言力を高めるようになったと言われる。(1) もっとも、災異説は陰陽五行説を根本原理とするとはいえ、理論は統一されてはおらず、災異の解釈は様々に行われた。そして、漢末には厖大な量の事例と多様な解釈からなる災異説の知識群が集積されていたのである。

曹魏の王粛（一九五～二五六）は、著名な経学者であり、また同時に、熱意に満ちた政治家であったことで知られる。その彼も災異説の信奉者であり、いくつかの実際に行った災異解釈の言説が今日に遺されている。それらの言説はこれまで研究されることは無かった。しかしながら、災異説が儒者と政治との関係を密接にするものであることを考慮すれば、王粛の災異思想の研究は、政治家であることがその人格において大きな比重を占める

王粛の学問・思想の特質を理解する上できわめて有益であると言えよう。

本論考は、王粛の災異解釈の実例を検討し、またその理念を析出して、彼の災異思想の本質を解明しようとするものである。

一

『三国志』魏書巻十三王朗伝に附された王粛伝（以下、本伝と称する）に見える王粛の災異に関わる言説は、次の二条である。[2]

（一）嘉平四年（二五二）五月、「二魚長尺、集于武庫之屋」について。

（二）正元元年（二五四）、「白気経天」について。

（一）から見てみよう。本伝は次のように記す。

時有二魚長尺、集于武庫之屋。[3] 有司以為吉祥。（王）粛曰、「魚生於淵、而亢於屋、介鱗之物失其所也。辺将其殆有棄甲之変乎。」其後果有東関之敗。

すなわち王粛説は、水性動物である魚が、陸上の建物の屋上に揚がったのは、魚類がその本来の居場所を見失った（見失うであろう）ことを示し、災異の現象としては、辺境において将帥が、その本来のあり方であるはずの軍装を放棄すること、つまり敗走することの凶兆である、とする。「東関之敗」とは、同年十二月、前月から呉の征討に向かった魏の征南大将軍王昶らが、逆に呉の大将軍諸葛恪の抗戦に会い、東関（現在の安徽省巣県附

近）で大敗したことを指す。

この変事は、唐・房玄齢等撰『晋書』巻二十九「五行志」下、及び梁・沈約撰『宋書』巻三十三「五行志」四にもそれぞれ「魚孽」の項に記載されている。両志二字の違いを除き同文、いま晋志を転載する。

魏斉王嘉平四年五月、有二魚集于武庫屋上、此魚孽也。王肅曰、「魚生於水、而亢於屋、介鱗之物失其所也。辺将其殆有弃甲之変乎。」後果有東関之敗。干宝又以為高貴郷公兵禍之応。二説皆与班固旨同。

干宝の説は今は措くとして、班固の旨とは、恐らく『漢書』五行志を意味するのであろう。『漢書』巻二十七「五行志」中之下に「魚孽」の項がある。

史記秦始皇八年（前二三九）、河魚大上。劉向以為近魚孽也。是歳、始皇弟長安君将兵撃趙、反、死屯留、軍吏皆斬、遷其民於臨洮。明年有嫪毐之誅。魚陰類、民之象、逆流而上者、民将不従君令為逆行也。其在天文、魚星中河而処、車騎満野。至于二世、暴虐愈甚、終用急亡。京房易伝曰、「衆逆同志、厥妖河魚逆流上。」武帝元鼎五年（前一一二）秋、蛙与蝦蟇群鬬。是歳、四将軍衆十万征南越、開九郡。成帝鴻嘉四年（前一七）秋、雨魚于信都、長五寸以下。成帝永始元年（前一六）春、北海出大魚、長六丈、高一丈、四枚。哀帝建平三年（前〇四）、東莱平度出大魚、長八丈、高丈一尺、七枚、皆死。京房易伝曰、「海数見巨魚、邪人進賢人疎。」

始皇八年の変事は、魚が黄河を逆流したに過ぎず、劉向も「近魚孽」とするように、「魚孽」そのものではない。水性動物がその棲処を飛び出したわけではないからである。むしろ魏の嘉平四年の変事と合致するのは、信都に魚が雨ふった成帝鴻嘉四年の事件であろう。しかしながらここには、班固は京房の易伝を引証するだけで、自己

の見解を述べていない。またその易伝の言葉も、「海数しば巨魚見はるれば、邪人進み賢人疎ぜらる」と言うもので、王粛の説とは、ピントがずれている。したがって晋・宋両五行志が言う「班固旨」とは、始皇八年の条の「魚は陰の類、民の象、逆流して上る者は、民将に君令に従はず逆行を為さんとするなり。其の天文に在りては、魚星河に中して処れば、車騎野に満つ」を指すとせざるを得ない。だが、これもやはり「車騎満野」の部分を除いては、干宝の説（干宝又以為高貴郷公兵禍之応。）はともかく、王粛の説と同旨とはいえない。王粛の説は、辺境の将軍が、（軍備を捨てて）敗走することに主眼がおかれているからだ。晋・宋両五行志の撰者は、王粛の説を十分理解していたとはいえない。

ところで、魚を兵と結び附ける考え方は、古来から行われていた。たとえば『洪範五行伝』に曰う、「魚陰類也、下人象。又有鱗甲、兵之応也。（『隋書』巻二十三「五行志」下所引）」と。また京房の易伝に曰う、「魚去水、飛入道路、兵且作。（『晋書』巻二十九「五行志」下所引）」と。そして晋・宋両五行志が紹介する干宝の説は、これらをよく咀嚼して明快である。晋の武帝の太康中（二八〇～二八九）、鯉魚二匹が武器庫の屋上に現れたという、魏の嘉平四年の事件と同一の事象に対し、干宝は次のように述べる。

干宝以為、「武庫兵府、魚有鱗甲、亦兵類也。魚既極陰、屋上太陽、魚見屋上、象至陰以兵革之禍干太陽也。」（『晋書』巻二十九「五行志」下）

魚は鱗あるが故に既に、軍事を象徴する。それが更に武器庫の屋上に現れたのだから、戦乱は必至である。この干宝が要領よくまとめた従来の通説に加えて王粛は、至陰の物（魚）が至陽の場所（屋上）に上がってしまったのだから、その本来のあり方を放棄している現象であると、論を進める。すなわち、魚は軍事の象徴という従

来の説を、魚が本来のあり方を失ったことは、軍事に於て本来のあり方を失い軍備を捨てる（敗北する）ことの凶兆という説に発展させたのである。ただし、敗北するのが、「辺将」であるとまで占ったのに、如何なる根拠があるのかは不明である。

二

（二）について本伝は次のように記す。

嘉平六年（正元元年、二五四）（中略）是歳、白気経天。大将軍司馬景王（司馬師）問（王）粛其故、粛答曰、「此蚩尤之旗也。東南其有乱乎。若君脩己以安百姓、則天下楽安者帰徳、唱乱者先亡矣。」明年春、鎮東将軍毌丘倹・揚州刺史文欽反。

王粛の言説の要点は、a「経天」した「白気」は、「蚩尤之旗」、b「蚩尤之旗」の象は、東南における乱、そしてc将来「乱」が生起した時、「君」がわが身を修めて人民を安定させておれば、乱は失敗に終わるだろう、という三点である。cは彼の政治思想に属する事柄と思われるので、[4] ここではa・bについて論じる。

この正元元年の「白気経天」の天象は、天文学的に重要であったらしく、『晋書』巻十三天文志下及び『宋書』巻二十三天文志一にも記載されている。両志多少の異同があるが、いま晋志を転載する。

高貴郷公正元元年（二五四）十一月、白気出南斗側、広数丈、長竟天。王粛曰、「蚩尤之旗也、東南其有乱乎。」二年（二五五）正月、有彗星見于呉・楚分、西北竟天。鎮東大将軍毌丘倹等拠淮南叛、景帝（司馬

師）討平之。案占、「蚩尤旗見、王者征伐四方。」自後又征淮南、西平巴蜀。是歳、呉主孫亮五鳳元年也。斗・牛、呉・越分。案占、「呉有兵・喪、除旧布新之象也。」太平三年（呉の年号、魏の甘露三年、二五八）、孫綝盛兵囲宮、廃亮為会稽王、故国志（『三国志』）又書於呉也。淮南江東同揚州地、故于時変見呉・楚之分（原作「呉・楚、楚之分」、一「楚」字衍。依宋志削）、則魏之淮南、多与呉同災。是以毋丘倹以孚為己応、遂起兵而敗。

天象そのものについて右の記事が、王粛本伝よりも詳しいのは、「白気」の出現した天の位置が、「南斗の側」であり、その規模が、「広さ数丈、長け天を竟む」ことである。

この「白気」（＝蚩尤之旗）が「南斗側」に現れたことと、翌年正月に、彗星が呉・楚の分野に現れたこととは、「占を案ずるに、「蚩尤の旗見はるれば、王者四方を征伐す」と。（中略）斗・牛は、呉・越の分なり。占を案ずるに、「呉に兵・喪有り、旧を除き新を布すの象なり」と。（中略）淮南・江東は同に揚州の地、故に時に変呉・楚の分に見はるれば、則ち魏の淮南、多く呉と災を同じくす。」と解説される。

いうまでもなく分野説に基づけば、南斗・牽牛の星宿は呉・越、揚州に配当される。[5] したがって、この南斗（牽牛）に異変があったのを、揚州の異変の豫兆とする解釈は説得力を持つ。そしてこの解釈によって、本伝の記述だけではよく分からなかった、王粛の説の「東南其有乱」の部分が、はじめて理解される。なぜなら、この地方は、首都洛陽を中心にする曹魏の国から見れば、まさしく「東南」に当たるからである。これで、「白気経天」に対する王粛の説の要点のbが、証明された。しかしながら要点のaは、いま一歩よく分からない。

そもそも「蚩尤之旗」とは何なのか。『晋書』巻十二天文志中に「蚩尤旗」の説明がある。

雑星気。図緯旧説、及漢末劉表為荊州牧、命武陵太守劉叡集天文衆占、名荊州占。其雑星之体、有瑞星、有妖星、有客星、有流星、有瑞気、有日月傍気、皆略其名状、挙其占験、次之於此云。

「妖星。一曰彗星、所謂掃星。（中略）二曰孛星、彗之属也。（中略）六曰蚩尤旗、類彗而後曲、象旗。或曰、赤雲独見。或曰、其色黄上白下。或曰、若植藿而長、名曰蚩尤之旗。或曰、如箕、可長二丈、末有星。主伐枉逆、主惑乱、所見之方下有兵、兵大起、不然、有喪。（中略）河図云、（中略）熒惑散為昭旦・蚩尤之旗・昭明・司危・天纔・赤彗。

すなわち、「蚩尤（之）旗」とは、天文に関して言えば、元来、熒惑の精気が分散し生じた、「彗星に類して後ろに曲がり、旗に象どる」もので、「枉逆を伐つことを主さどり、惑乱を主どり、見はるる所の方の下に兵有り、兵大いに起り、然らざれば、喪有り。」というものなのである

右の晋志の説は、自ら言うように、劉叡撰『荊州占』や「河図」（『河図稽耀鈎』、『重修緯書集成』巻六、五一～五二頁）に基づいている。しかしながら「蚩尤（之）旗」の用例はむろん、それらよりもっと遡る時代の文献にも見える。次にいくつか挙例する。

○『呂氏春秋』巻六季夏紀明理篇

其雲状有若犬若馬。（高誘注「雲気形状如物之形也。」）（中略）有其状若衆植華以長（畢沅校「旧校云、華一作藿」）、黄上白下、名蚩尤之旗。

○『史記』巻二十七天官書及び『漢書』巻二十六天文志

蚩尤之旗、類彗而後曲、象旗。見則王者征伐四方。

○曹魏の王象・繆襲等撰『皇覧』（『史記』巻一「五帝本紀」集解引。）

蚩尤冢在東平郡寿張県闞郷城中、高七丈、民常十月祀之。有赤気出、如匹絳帛、民名為蚩尤旗。

『呂氏春秋』の「蚩尤之旗」は、前後の文脈から見て、「雲気」の形状を指す。（高誘注参照）したがってここには、適当な事例ではないかも知れないが、その形状が「若衆植華以長、黄上白下」と言うのは注意を払う必要がある。それは晋志が或説として引用している二条と同説だからである。(6)

次の『史記』天官書及び『漢書』天文志の「蚩尤之旗」に関する説明は、まったく晋志と同一である。晋志下に「占」と呼ぶものは、この後半部に他ならない。晋志の撰者が、『史記』『漢書』を読まなかった筈はない。ならば、なぜ史・漢の名を挙げず、「占」と云うのだろうか。恐らく、漢末に劉表の命令によって劉叡が編纂した『荊州占』に、当時存在した占星術に関するあらゆる文献とともに、これらの史・漢の文章も一括して収録され、それ以後は、『荊州占』が、占星術の基本的な文献として、権威を有するようになり、それ以前の文献にまで遡る必要がなくなったからであろう。

最後に挙げた『皇覧』は、当時、東平郡寿張県闞郷城中にあった、高七丈の蚩尤の墳墓から立ち昇る、一匹の絳（あか）い布帛のごとき赤い霧気を、人々が「蚩尤旗」と名附けていたと述べる。袁珂はこの現象の原因を「この敗北した英雄は、まだ自分の〔黄帝との戦争における〕敗北を納得しないで、まだそのなかで憤ってやまず、怨気が天を衝くのだろう。」(7)と解釈する。

さてこの『皇覧』の「蚩尤旗」は、一匹の絳い布帛のごとき赤い霧気であり、晋志中の或説「赤雲独見」にほぼ相当する。以下は推論だが、恐らくこれが、「蚩尤（之）旗」の原型であろう。知識階級による神話・伝説の

再編の動きとは無縁に、民間においては、素朴に蚩尤を異貌異能の神として尊崇し、毎年十月その墳墓に祭祀を捧げていた。その墳墓から赤気が立ち昇ったとき、人々はそれを、黄帝との戦争に敗北したが、憤怒未だやまぬ蚩尤の発した怨気と考えた。その赤気の形状は、「如匹絳帛」、人々には旗に見えた。そこでこれを、「蚩尤旗」と名付けたのである。呂覧の「蚩尤之旗」は、形状の類似から「若衆植華以長」なる「雲気」に、「絳（赤）」と「黄上白下」との色彩の相違を無視して、その名を与えたのであろう。時代が降り、天文・占星の進歩にともない、天空に「類彗而後曲」、旗に見える天象を発見し、これにも「蚩尤之旗」の名を与えた。やがて『史記』天官書に記載され、また『漢書』もこれを踏襲し、天象としての「蚩尤之旗」は定着した。彗星は軍事・反乱・災厄の星、それに類するから、これも軍事・反乱・災厄を司る星に違いない。その形状は旗、そこで雲気の「蚩尤之旗」を連想したのだろう。蚩尤は、軍神だからである。[8] 妖星「蚩尤之旗」の性質は、更に時代が降ると、河図説がその出自を補強し、冢気時代や雲気時代の属性まで含め、無秩序に『荊州占』に放り込まれ、結局整理されないまま、『晋書』天文志や『開元占経』などの後世の文献に、受け継がれたのであろう。

王粛の説に戻ろう。正元元年十一月に彼が見た天象は、「経天」（本伝）とか「広数丈、長竟天」（晋志）と規模を言うだけで、形状は不明だが、「白気」であった。したがって、これを「蚩尤之旗」と判断した根拠は、『呂氏春秋』明理篇の系統を引く晋志（『荊州占』）の或説「其色黄上白下」に違いない。そして王粛は、分野説と『史記』の系統を引く占「見則王者征伐四方。」あるいは或説「主伐枉逆、主惑乱、所見之方下有兵、兵大起、不然、有喪。」に基づき、「東南其有乱乎」と述べたのであろう。

ところでこの推論には、王粛が、『荊州占』を見たという憶測が含まれている。むろん、そうでなくとも、呂

覧や『史記』を見ていさえすれば、あるいはそれらの流れを汲む占星術の文献や口伝に通じていれば、十分右の判断は下せるだろう。しかしながら王粛が、『荊州占』を見たという憶測の方が、より自然である。と言うのは、彼は宋忠を通して、荊州の学問と密接な関係にあるからである。王粛の本伝に云う、「年十八、従宋忠読太玄、而更為之解。」[9]と。宋忠は、荊州で劉表が『荊州占』を編纂させていた頃、その学校にあって『後定五経章句』を撰定していた学者である。[10]この宋忠が、王粛に『太玄経』を教授する他に、『荊州占』を伝えたとしても不思議ではない。

三

正元元年十一月に天空に出現した「白気」を「蚩尤之旗」と観て、「東南方向に兵乱あり」と占った王粛の予言は、翌年春に起こった毋丘倹と文欽との謀反をもって的中したとされる。この話には続きがある。王粛本伝によれば、予言の的中に感じ入った司馬師は王粛に、「霍光の夏侯勝の言に感じ、始めて儒学の士を重んじたるは、良に以る有るなり」と述べ、さらに「国を安んじ主を寧んずるは、其の術焉くに在りや」と諮問したのである。それに対して王粛は、昔年の関羽の事例を参考にした策を授け、司馬師はそれに従って、毋丘倹・文欽の反乱を鎮圧した。

霍光と夏侯勝との間の逸話は、『漢書』巻七十五夏侯勝伝に見える。西漢の夏侯勝（前一五〇～前六一）[11]、字は長公、少くして孤、学を好み、夏侯始昌より『尚書』及び『洪範五行伝』を受け、災異を説いた。霍光との関係

は、元平元年（前七四）に崩じた昭帝の後継を巡る一幕の間に生じる。一旦帝位に即いた昌邑王の度重なる遊興のための外出に、夏侯勝は、「天久しく雨ふらず、臣下に上を謀る者有り。陛下出でて何くに之かんと欲するや」と諫言した。王は怒って夏侯勝を捕縛して吏に引き渡し、吏は大将軍霍光に報告するも、霍光は罪に問わなかった。だがこの時、霍光は車騎将軍張安世と昌邑王の廃立を画策しており、安世が計画を漏泄したとして彼を責めたが、事実はそうでなかった。そこで夏侯勝を召喚して問うたところ、夏侯勝は、「洪範伝に在りて曰く、『皇の極まらざる、厥の罰常に陰、時に則ち下人に上を伐つ者有り』と。察察の言を悪む、故に臣下に謀有りと云へり」と対えた。霍光らは大いに驚き、此を以て益ます経術の士を重んじたという。

ここに為政者の儒者に対する価値判断基準の一典型を見て取ることができる。為政者である霍光が「経術の士」つまり儒者の重要性を再認識した契機は、夏侯勝が的確な予言を行ったことにあった。すなわち、為政者にとっての儒者の存在価値は、一つには、それが優秀な占い師である点に認められるのだ。ちなみに、儒者のこのよく当たる占いの根拠は災異説である。災異説は支配層による儒教（経術）の受容にあたって、一定の影響力を行使したと言えるだろう。[12]

ところで、夏侯勝はまた、次のような言明をしたことで知られる。

始、（夏侯）勝毎講授、常謂諸生曰、「士病不明経術。経術苟明、其取青紫如俛拾地芥耳。学経不明、不如帰耕。」（『漢書』夏侯勝伝）

すなわち、士が経術（儒教）の習得に勤しむべき理由は、それが官界での栄達に有利であるからだと、夏侯勝は公言していたのである。あからさまに儒教（の知識）を出世の道具とみなす夏侯勝のこの考え方は、その露骨

さ故に、後世の儒者たちの嫌悪の的となるが、西漢中期における儒者の地位向上の様子を率直に反映していると言うべきであろう。当時（昭・宣帝期）ようやく儒教は経世に有用な術だと認められ、儒者が高位につきはじめた[13]。儒教が隆盛に向かいだした、まさにその勢いを夏侯勝は右の言葉で表現したのである。

以上の検討から判明したのは、儒教は、社会に浸透しはじめたその当初、統治に役立つ一種の技術として為政者に認識され、儒者の方も一面ではその技術・知識を富貴を獲得する手段とみなしていたことである。

さてここで三国時代にもどり、司馬師と王粛とのやり取りに注目してみよう。司馬師がその言葉の裏で、暗に霍光に自分を、夏侯勝に王粛をなぞらえていることは、誰の目にも明らかである。ともに的確な占い（災異解釈）をきっかけに、為政者が儒者に対する尊敬の念を新たにしたのである。正元二年（二五五）といえば、曹爽が実権を掌握し、その庇護のもと何晏・王弼らが盛んに玄学の議論（清談）を戦わせていた正始年間（二四〇～二四八）を去ること未だ十年にも満たない頃であり、儒教は依然として低調であった。その当時にあって、曹爽・何晏打倒の首謀者である司馬懿の長子としてその権力を受け継いだ司馬師が、儒者・儒教の存在価値を再確認した事実は重要である。精神生活の面ではともかく、現実政治の面では儒教は統治に有効であることが認められたのだからだ。

ところで、災異解釈ばかりでなく、戦術をも諮問していることから、司馬師が王粛を単なる学者でなく、兵法をもわきまえた政治家と見なしていることが窺える。また、王粛も戦術に関する自説を堂々と展開しており、やはり自分自身を学者以上の存在と考えているようである。これは王粛個人の資質の問題であって、儒者一般について言ったものではないかもしれない。その当否は、王粛の儒者観の検討を俟って判断すべきであろう。いま、

災異をめぐって王粛の儒者観の一斑が現れている『孔子家語』の一節を見てみよう。

現行の『孔子家語』は王粛の偽作として知られるが、それだけに王粛の思想がよく見て取れる。取り挙げるのは、辯政篇の次の一節である。

斉有一足之鳥、飛集於公朝、下止于殿前、舒翅而跳。斉侯大怪之、使使聘魯問孔子。孔子曰、「此鳥名曰商羊、水祥也。昔童児有屈其一脚、振訊両肩而跳。且謡曰、『天将大雨、商羊鼓舞。』今斉有之、其応至矣。急告民、趨治溝渠、修堤防。将有大水為災。」水溢泛諸国、傷害民人。唯斉有備不敗。景公曰、「聖人之言、信而有徴矣。」

典拠として清の孫志祖（『家語疏証』巻二）・陳子珂（『孔子家語疏証』巻三）が指摘するのは、『説苑』辨物篇の次の一節である。

後斉有飛鳥、一足、来下止于殿前、舒翅而跳。斉侯大怪之、又使聘問孔子。孔子曰、「此名商羊。急告民、趣治溝渠、天将大雨。」於是如之。天果大雨。諸国皆水、斉独以安。孔子帰、弟子請問。孔子曰、「（中略）児又有両両相牽、屈一足而跳、曰、天将大雨、商羊起舞。今斉獲之、亦其応也。」夫謡之後、未嘗不有応随者也。故聖人非独守道而已也。睹物記也、即得其応矣。

『孔子家語』が『説苑』を改変している箇所は、次の二点である。

①商羊の登場を「水祥」と断言し、この一節を災異説の文章と明確に位置づけたこと。

②溝渠の整備に堤防の修築を付け加え、またそれによって斉が災害の被害を未然に防いだことをより強調して、災異とともにそれへの対策の重要性を喚起したこと。

また、『孔子家語』の結びの言葉である「聖人の言、信にして徴有り」は、『説苑』の「聖人は道を守るのみに非ざるなり。物を賭て記すや、即ち其の応を得るなり」とほぼ同内容のように見えるが、改変の②を考慮に入れれば、いささか事態は異なってくる。すなわち、『説苑』がもっぱら児謡の的中によって聖人（孔子）の博識ぶりを讃えるのに対し、『孔子家語』では孔子の災異解釈が的確であったこととともにその災害対策が適切であったことが、聖人（孔子）の言葉の信頼性と効験性とを称揚する根拠となっているのである。これこそが王粛の災異思想の特徴であり、また、孔子はまさに儒者の原型というべき存在であるから、この事例は王粛の儒者観の一端を示していると言えよう。

王粛にとって災異を解釈することとは、単に今生起した現象から将来発生する異変を予言するだけで終わらず、さらに進んで、それに対処する方策を具体的に進言することまでを含むのである。だとすれば、災異解釈の担い手である儒者の社会におけるアイデンティティー identity は理念として、有司（職業的官僚）であるにとどまらない、統治により積極的に参加する者—すなわち政治家に他ならない、と王粛は認識していたと言えよう。

もちろん、現実にはすべての儒者がそうであるわけではない。たいていの儒者は儒教を「禄利之路（『漢書』儒林伝賛）」と看做して官僚生活を送ったり、あるいは学者として学問の世界に沈潜している。しかしながら、王粛の観念では、少数の優れた儒者は、儒者の鼻祖である聖人孔子の門に連なるものとして、国家経営の重大なる一翼を担うべき存在なのである。

結　語

災異説はそもそも政治的言説として発生した理論である。災異現象を学的対象として客観的に考察するとしても、現実社会を扱う以上、下される解釈・判断は多かれ少なかれすでに政治的色彩を帯びざるを得ない。といっても必ずしも、災異解釈をなにがしかの政治的意図や予断を以て恣意的に行うということではない。むしろ、政治に直接関わる当事者が災異を解釈する場合、その人物が災異説に造詣が深ければ深いほど、自己の持つ知識体系を駆使して、より真摯に行うであろう。王粛がまさにそうであった。

王粛の時代、曹魏政権内では法理主義や玄学が流行し、儒教の地位は相対的に低下していた。その状況にあって、災異説は儒者の存在価値を為政者に再確認させるのに有効な働きを示したのである。あたかも、儒教の勃興する西漢昭・宣帝時代に夏侯勝が災異説を以て霍光に重んじられたように、王粛もまた的確な災異解釈によって時の最高実力者である司馬師に感銘を与えたのである。

その王粛の災異解釈の典拠となったのは、『洪範五行伝』や京房『易伝』などを経て、『漢書』五行志に至って一応の完成を見た陰陽五行説・災異説による占候の伝統的知識群であり、とりわけ、宋忠を経て伝えられた、漢末の荊州牧劉表のもとで編まれた網羅的占術書である『荊州占』であった。むろん、本論考ですでに考察したように、それら典拠群は雑然たる諸説に満ちており、王粛の下した災異解釈を普遍性をもって導き出せるというものでは必ずしも無い。しかしながら、王粛の予言はともかく的中したのである。そして、その予言の特徴として注目すべきは、最初の事例（魚孽）では、吉祥とする有司の判断に異を唱え、さらには伝統的解釈の枠から踏み出して、王粛は「辺将の敗退」とまでより具体的な解釈を行い、また二つ目の事例（白気経天）では、災異解釈

を的中させたあと、司馬師の求めに応じて戦術までをも伝授していることである。この積極的な姿勢は、王粛の儒者観の現れに他ならない。

王粛の理念として、優れた（という限定附きながら）儒者は単なる役人で終わってはならず、第一義的に統治の枢要に参画する政治家であるべきなのである。それゆえに、災異解釈に際しても、儒者は将来の事象を予言するだけではなく、それらへの対応策までをも進言する義務を負っているのだ。これが王粛の災異思想の根本的な特質なのである。

注

（1）漢代における災異説の変遷については、日原利国「災異と讖緯」（『東方学』第四十三輯、のち『漢代思想の研究』、研文出版、一九八六、に収録）を参照。

（2）本伝以外に見える王粛の災異説として、太和六年（二三二）の「奉詔為瑞表」（『太平御覧』巻五八二所収）、「賀瑞応表」（『藝文類聚』巻九九所収）、「告瑞祀天宜以地配議」（『通典』巻五五所収）がある。本論考の紙幅の関係で今回は検討できなかった。

（3）『三国志』巻四、三少帝紀「（嘉平四年）夏五月、魚二、見於武庫屋上。」

（4）拙稿「王粛の政治思想」（『中国思想史研究』第十号）を参照。

（5）たとえば『晋書』巻十一天文志上「十二次度数。（中略）魏太史令陳卓更言郡国所入宿度。（中略）自南斗十二度至須女七度為星紀、於辰在丑、呉越之分野、属揚州。」「州郡躔次。陳卓・范蠡・鬼谷先生・張良・諸葛亮・譙周・京房・張

衡並云、（中略）斗・牽牛・須女、呉・越、揚州。九江入斗一度、廬江入斗六度、豫章入斗十度、丹楊入斗十六度、会稽入牛一度、臨淮入牛四度、広陵入牛八度、泗水入女一度、六安入女六度。」

（6）　但し晋志は「華」を「藿」に作る。「藿」は、呂覧旧校の「藿」と字音字形ともに似ている。

（7）　袁珂『中国古代神話』修訂本（中華書局、北京、一九六〇）一二三頁。

（8）　たとえば、『史記』巻二十八封禅書にいう、「於是始皇遂東遊海上、行礼祠名山大川及八神、求僊人羨門之属。八神将自古而有之、或曰太公以来作之。斉所以為斉、以天斉也。其祀絶莫知起時。八神、（中略）三曰兵主、祠蚩尤。」と。

（9）　王粛と宋忠との関係及び荊州の学問については、加賀栄治『中国古典解釈史』（勁草書房、東京、一九六四）五九～六九頁を参照。

（10）　『三国志』巻六、劉表伝、裴注「英雄記曰、州界羣寇既尽、表乃開立学官、博求儒士、使綦毋門・宋忠等撰五経章句、謂之後定。」

（11）　生卒年は、劉汝霖『漢晋学術編年』巻二、第一一四頁の考証に拠る。

（12）　西漢における災異説の状況については、澤田多喜男「前漢の災異説」（『東海大学紀要（文学部）』十五）、湯志鈞・華友根・承載・銭杭『西漢経学与政治』（上海古籍出版社、上海、一九九四）第五章第三節「陰陽災異和政教合一」を参照。

（13）　湯志鈞等前掲書第四章を参照。